

『六諭衍義大意』における経世済民の思想——「各安生理」と近世中期文学——

文学研究科国文学専攻博士後期課程2年 松岡 芳恵

はじめに

日本での『六諭衍義』の広がり、近世中期に琉球の程順則が中国から持ち帰ったことに端を発する。「六諭」とは明朝において国民の守るべき道德規範である「教民傍文」の中の一部であり、「孝順父母」「尊敬長上」「和睦郷里」「教訓子孫」「各安生理」「母作非為」の六条を指す。これが清代になって順治・康熙・雍正の三帝によって、「教民傍文」から「六諭」のみが取り出され、天下の道德律として喧伝された。この「六諭」を会稽の范鉉なる人物が解説したのが「六諭衍義」である。程順則によって大陸から琉球にもたらされ、後に薩摩へ渡ったこの書は徳川吉宗の目に留まり、荻生徂徠の施訓及び室鳩巢の和解を以て藩校や各地の寺子屋に広く流布することとなる。儒教思想における道德の教科書として、また手習いの教科書として活用されたのである。特に室鳩巢が和解を施した『六諭衍義大意』は様々な形での広がりを見せ、明治に入ってから出版を重ね続ける。

「六諭」が編まれた明末清初という時代に成立した概念が経世済民論である。「経世済民」とは今日の「経済」の語源であるが、元来は「世を^よ経^{おさ}め^{たみ}民を^{すく}済^すう」ことであり、狭義には今日と同様の生産・消費・売買などの活動を指すが、広義には政治論全般をも意味する。この概念と同時期に成立した「六諭」にも広義の意味での経世済民の思想が色濃く反映されており、それは室鳩巢の和解版である『六諭衍義大意』においても同様である。

『六諭衍義大意』は、教科書として流布したことから今日まで総じて教育学や社会学の観点から論じられることが多かったように思われる。あるいは約九〇種類に及ぶ諸本があるため、文学の観点からしても諸本研究は充実しているものの、この『六諭衍義大意』自体が文学史の中でどのように位置づけられるのか等の研究は未だ手薄な印象がある。しかしながらこの書が庶民教化を目的として発行された以上、一般の文学作品にその影を求めるところも可能であろう。本論では思想史等の先行研究を踏まえつつ、文学史の中の『六諭衍

義大意』について考察を加えてみたい。

一、『六論衍義大意』刊行経緯と和解者・室鳩巢

冒頭で述べたように、「六論衍義」は程順則が大陸より持ち帰った書である。程順則は儒教を学ぶため中国に渡った際に「六論衍義」を閲し、この内容が道徳教育に非常に有用であることに感服して、出身である琉球へ持ち帰り、自費出版した。正徳四年（一七一四）にはこの自費出版本が薩摩藩主・島津吉貴の元へ献上される。そしてその五年後の享保三年（一七一九）、吉貴は將軍吉宗から琉球の政治や文学について質問を受けたことからこの『六論衍義』を献上することとなる。室鳩巢の『六論衍義大意』が刊行されるのはそれから四年経った享保七年（一七二三）のことである。

室鳩巢は万治二年（一六五八）〜享保十九年（一七三四）の人で、江戸生まれ。十五歳で金沢藩に仕えるも京の木下順庵に弟子入りし、正徳元年（一七一一）には新井白石の推挙で幕府に仕官することとなる。六代家宣、七代家継、八代吉宗に仕え、特に吉宗期には侍講として享保の改革をサポートした。

吉宗は享保六年（一七二二）に鳩巢へこの書を和解するように求めた。『兼山秘策』享保六年閏七月一九日、大地新八郎宛書簡には

當月十三日木下平三郎同時登城候處（中略）六論衍義と申書物御前より御出し被_レ成、かなにて和らげ可_レ被_レ遊候、如何奉_レ存候哉、宿へ持參仕候て熟覽可_レ仕旨被_二仰出_一候

とある。ここで鳩巢は初めて「六論衍義」を閲し、和解にとりかかることとなる。

『兼山秘策』享保六年十月十九日、青木藏人宛書簡には、

六論衍義最前被_二仰出_一候以後、かなに和らげ上中下三冊に仕立指上候處に、四五日過候て被_二仰出_一候は、書の仕立宜敷被_二思召_一候、御直にも御覽被_レ成、且又御側の衆へも御讀せ被_レ成、各へ御聞かせ候處、何も感通仕由申候、然ば和らげ様も宜敷と被_二思召_一候、然共思召には是より短く被_レ成度被_二思召_一、此度上候は一段の紙數七十程も有_レ之候一段を三枚位につめ可_レ申、左候はゞ文意達しがたく可_レ有_レ之候間、只今の様に感情うつり申間敷被_二思召_一候、とかく人に承候て感じ不_レ申候ては、又詮なき事に被_二思召_一候、とかく本書の意を取候て短く致し、且又感情のぬけ不_レ申様に仕見可_レ申候、先一段仕候て差上候様にと重て被_二仰出_一候（傍線引用者）

とある。將軍吉宗は鳩巢の和解初稿を閲し、とにかく短くまとめな
おすようにという旨の命を下す。これに対し鳩巢は「餘り短候て紙
數無_レ之候ては却て見申者軽く可_レ存候」と危惧し、また「上中下に
て一部の書と可_レ申、其上文段長く候へば其品とも多候故、面白く
も存候て見可_レ申」と同書簡の中で述べている。吉宗はこの『六論
衍義』を庶民教化に使用すべく、少しでも多くの者が求めやすい体

裁を取りたいと考えていたようで、もちろん鳩巢もこれに従って和解を書きなおすわけだが、内心はあまりこれを面白くは思っていないのかも知れない。『先哲叢談』²では鳩巢のことを「深く当世好みて異議を立つる者を悪み」とし、思想面で相対した山崎闇齋派にその思想を痛烈に批判した書簡を当てたりしている様子が書かれている。鳩巢の一派は後世に思想の面で大きく影響を与えることはなかった。もちろん大因は鳩巢という人が程朱学を忠実に解釈することに重きを置き、自身で独自の思想を打ちださなかったところにあるのだろうが、こうした性格も少なからず影響しているのかもしれない。

吉宗の命に従って短縮した和解を執筆していた鳩巢にとって予想外の出来事は、荻生徂徠の手によって和点が施された『六論衍義』が、自分が執筆している和解本よりも先に刊行されたことである。『兼山秘策』享保七年正月七日青木藏人宛書簡に

六論衍義に舊臘唐本を荻生物右衛門に和點被_レ仰付_二印行被_二仰付_一、臘月廿四日時分出來仕候筈に候由書物屋申聞せ候、其後出來の義未承不_レ申候、此書中國の俗語まじり候由御聞被_レ遊候、左候へば左様の儀_レ存候ては、和點難_レ仕可_レ有_レ之と被_二思召_一いかゞ哉と去秋有馬兵庫殿御尋にて候故、前後の文體にて見候へば、大方は相知申物に候へども、俗語を兼て存知候者に被_二仰付_一候は、可_レ然奉_レ存候旨申上候、其後惣右衛門に被_二仰付_一(傍

線引用者)

とある。『六論衍義』は中国の俗語で書かれており、前後の文脈から意味は判断して和解することはできるけれども点を付すことはそうはいかないので、自分よりも俗語に長けた人物に依頼してほしいと一旦施訓の依頼を辞退した旨が述べられているが(一重線部)、その依頼が徂徠にいったことは鳩巢にとって意外なことであったことがわかる(点線部)。『徳川実記』³によれば享保六年(一七二二)九月十五日に徂徠は「六論衍義の訳を命ぜら」れ、翌七月十七日には吉宗自身が徂徠の付訓を確認し、「これは世上風俗のためにもしかるべければ上本あるべし」と、徂徠に序文も書くように命じている。先に挙げた正月七日の書簡を見る限りでは、鳩巢にはこういった動きは全く知らされずにいたことになる。東恩納寛淳は、正徳四年の鳩巢書簡にて徂徠のことを「此人至極の高慢もの」などと評していることを挙げて、「鳩巢は徂徠に対して夙くから反感を有してゐた」と述べている。⁴ましてや自分にも内密に徂徠が『六論衍義』を付訓し、しかも先にそちらが刊行されてしまったとあれば、鳩巢がかねてより良く思っていなかった徂徠と、更には吉宗をも厭うことも理解できる。鳩巢と徂徠が二大ブレンであったとはいえず、後吉宗が徂徠寄りになっていくその一端がこの件に見ることができ。こうした経緯を経て、鳩巢の和解本はようやく享保七年四月二十日に脱稿し『六論衍義大意』として刊行された。ちなみにこの書を

手習いの教科書としても使用させるべく筆耕に尊円流の能書家である石川勘助を採用したこと、各章末に詩を起き、世間で流布していた往来物のような体裁をとって、かつ書名を『六論衍義大意』としたことなどが吉宗の「御好み」であることが『兼山秘策』享保七年四月九日、奥村源左衛門宛書簡に記されている。

このように紆余曲折ありつつも刊行された鳩巢の和解版こそが、徂徠施訓本よりも広く流布することとなるのである。

二、「各安生理」考

「六論」とは「孝順父母」「尊敬長上」「和睦郷里」「教訓子孫」「各安生理」「母作非為」の六条を指す。『六論衍義大意』は享保七年の刊行後、以降明治年間まで再版され続けたが、その中には本文をさらに簡略なことを用いて通釈した異本も数多く存在する。その一つであり、最も端的に「六論」をまとめているのが『教訓道しるべ』である。これによれば「六論」は

第一 孝順父母 是八人の子たるもの。孝行を専とし。何事も親にそむかざるべき教を諭せり。

第二 尊敬長上 是ハ我より年かさなる人と。われより目うへなる人に。無礼なきやうにと。行儀を正すべき論なり。

第三 和睦郷里 是ハ家内をはじめ一ツ所に住居する人々。たがひに中よくくらし。ねんごろに附合すべきの論なり。

第四 教訓子孫 是ハ子や孫をよくくをしへ導き。善人に仕たつべきのさとしなり。

第五 各安生理 是ハ人々天よりあたへ給ふ産業をつとめ。仮にも外をおもふまじき論なり。

第六 母作非為 是ハ道理と不道理といふ事ありて。人々悪事をせぬやうにとの論なり。

という内容である。本論では特に第五に挙げられている「各安生理」について考察したい。

「生理」とは『六論衍義大意』に「貴賤貧富を論ずる事なく、人々我にあたりたる所作あり」とあり、すなわち士農工商それぞれに与えられた生涯における仕事のことを指す。また同書によれば「士」は「學問をし。武藝をたしなみ。義理を忘れず。公役をつとむ」ことが生理であり、「農」は「耕作をつとめて。おほやけの年貢をか、さず」ということが生理である。「職人」は「家藝を精しくして。所傳の習を失はず」であり、「商」は「賣買をいとなみて。非分の利をもとめず」とある。これら自分に与えられた職分を務めれば「一生安穩にしてくらすべし」と説いている。

はじめの部分で述べた通り「経世済民」とは明末清初に成立した概念であるが、日本でこれを始めに説いたのは熊沢蕃山である。『大學或問』は彼の著作の中で最も知られているが、これは「學問は時処位に応じて変通すべきだ」という立場に立ち、學問の目的を天下に

道義する途を会得するところにある」とした蕃山が幕府に対する政
策論をまとめたものである。参勤交代への批判を述べるなど幕政の
問題点を直接述べたものであるため、長らく秘書とされ、また蕃山
自身も蟄居謹慎の処分を受ける。しかし蕃山の思想は荻生徂徠を始
めとして後世の経世家に影響を与えている。徂徠と鳩巢自体は相容
れなかったが、双方ともに吉宗のブレンとして享保の改革に関わ
っているので、ひいては蕃山の思想をも『六論衍義』と関連させる
必要がある。

『大学或問』でまず目にとまるのは見返し部分の「堯舜の道を取
て。時⁶処位の発明あり。」(傍線引用者)という文である。古代中国
の賢君である堯・舜の治世を参考にして、時・処・位に応じた道の
ありかたを開き明らかにするという。これはまさに「各安生理」に
説かれている思想に通じる。また、序文にある「然此書用國字者欲
俾吾邦士大夫。不嫻異國文辭者。易曉也瘦矣」という態度は、吉宗
が『六論衍義』を訳させた理由と全く同じである。吉宗自身が『大
学或問』を読んだかどうかは定かでないが、学問を好まず実学を重
んじた吉宗の行動が、実践的な政策をまとめた『大学或問』と一致
することは怪しむに足りない。徂徠が蕃山の影響下にある以上尚更
である。

また、より実践的であるという点では鳩巢も番山と同様である。
鳩巢が吉宗との問答をまとめた書が『獻可録』⁸である。巻上に「諸
大名参勤交替之儀二付申上候覚書」という条が記載されている。こ

こにおいて鳩巢は「参勤の格今少御定被^レ成様も可^レ有^レ之候」「人数
も格別減候」との提案をしている。『大学或問』において蕃山も
「江戸詰をゆるくし給ふ所。仁政の大本なり。」と、参勤交代の簡略
化を提案している。この部分を含め『大学或問』巻上及び『獻可
録』には様々な財政政策が書かれており、またその根底には「各安
生理」と同様の思想がある。

『大学或問』にある「時・処・位」の発明が、享保の世にあつて
『六論衍義大意』を通じて庶民階級にも浸透することとなるのである。

三、近世中期諸作品における「各安生理」

「各安生理」の思想すなわち各々の職分を守り精進すること、と
いう教えはまさに庶民階級を教化の射程に入れている。中山久四郎
は「六論」が個人の修身齋家は勿論、家族的社会的の孝子順孫、
または圓滿なる良紳士を作る教訓としては、眞に適切懇篤なるもの
なれども、忠君愛國の國家思想の養育には、不足の點あり」と評し
ているが、逆に個人道徳のみを説くことに徹底したことが庶民階級
への浸透を促進させたと考えられる。吉宗が『六論衍義大意』の各
条を「短く」まとめるということに執拗にこだわったのも、あくま
で「庶民」の教化を念頭においたからである。刊行以降、流行と衰
退の時期を繰り返しつつも明治年間まで出版され続けたのだから、
吉宗の目論見は成功したといえる。

この時代、幕府の運営は前代と変わらず米の値段を基準にした経

済であったが、一般社会では貨幣経済が浸透していた。実際蕃山の『大学或問』にも早くその矛盾点は指摘されていたし、吉宗自身もそれを感じていたために、経済に明るい大岡忠相を勘定奉行に任命した経緯もある。こういった社会情勢であるがためか、「六論」は様々な形で一般の書物にも散見される。特に「各安生理」の条は具体的に挙げれば商業書、心学書、心学からの影響が論じられている談義本に関連させるべき要素がある。本章ではこれらの一端を確認してみたい。

三―一 『六論衍義大意』と商業書

商業を材にとった作品は、例えば西鶴の町人物や其磧の気質物など、「浮世草子」の範疇に入るものが著名であろう。しかし寺子屋などで『六論衍義大意』と共に教科書として扱われたのは更に実学的な「往来物」である。実際、当時士農工商の四民それぞれに特化して編まれた往来物が多数出版された。特に「商」に関する書物では算盤の使い方や商家が扱っている様々な道具や商品の名称、漢字の読み方等をまとめている。それに対して西鶴や其磧の作品は「滑稽」を主とした話であり、その教訓色は決して濃くはなかった。しかし西鶴のような雅俗混淆文でありながらも教訓色の強い作品は存在する。そのひとつが大江文坡作『商人黄金袋』である。

『商人黄金袋』は安永四年（一七七六）に京都の菊屋七郎兵衛から出版された。この板元は『徳川時代出版者出版物集覧』¹⁰によれば

教訓書をよくしたようで、また『商人黄金袋』巻末の出版広告には西鶴や其磧の浮世草子やその他商業書が掲載されている。筆者の大江山文坡は明和から寛政にかけて活躍した文人で、主に仏教勸化本や、文坡独自の思想である道教を中心においた諸教一致を説いた談義本を多数執筆した。彼の晩年の作品である『成仙玉一口玄談』についても後述するが、これらの作品中には「各安生理」と同様の思想が散見される。ここでは『商人黄金袋』と『六論衍義大意』とを比較検討したい。

『商人黄金袋』は全一冊であり章立てなどはなく、「各安生理」を説いてゆく。しかしその中には細かな流れがあり、以下の通りである。

← 農工商それぞれに役割があること

← 儉約を実行すること

← 庶民をまず養うのは為政者のつとめであること

← 学問の適齢期

← 儉約を実行すること

← 商における実際の心掛け（接客など）

←
人間の行う「善」のこと

まずはじめに説かれるのが士農工商それぞれに役割があることであり、これは「わが生涯につきて定まりたる道理」を説く「各安生理」と同様である。「各安生理」の冒頭は「天地の間に生るゝほどの人。貴賤貧富を論ずる事なく。人々我にあたりたる所作あり」である。すなわち「四民平等」であると解釈できるが、これが士農工商で最も下層に置かれた商人の自我を説く『商人黄金袋』にも説かれていたのである。そしてこれは石田梅岩を創始者とする石門心学における根本の思想と同様である。

一般に梅岩の思想が最もよくまとめられた書だといわれているのが『都鄙問答』¹⁾であるが、梅岩はこの書にて「君を相くるは四民の職分なり。士は元来位ある臣なり。農人は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり。臣として君を相くるは臣の道なり。商人の売買するも天下の相なり。」と説いている。「儉約」と共に梅岩の中心思想となっているのがこの考えであろう。石田梅岩は享保十四年（一七二九）より京都にて実践哲学などを開講している。享保年間から起こったということは、吉宗の改革による庶民教化の影響と関係すると思われるのが妥当であろう。

「各安生理」はあくまで士農工商を平等にうたったものであり、商人に特化してその教理を説いているわけではない。故に『商人黄金袋』及び『都鄙問答』で商いにおける実際の心懸けを説いた部分

は『六論衍義大意』よりも実学に即した教訓が展開される。

『商人黄金袋』では「商人ハ世上の人の心をしるを第一とす。」という教訓が挙げられている。具体的に得意先を多く持つ醤油商人を例に挙げ、醤油入れを常に清潔に保ち黴臭いことがないようにしていること、醤油造りの腕を常に鍛錬していること、他店より少し安く売ることが前述の教訓にかなっていると説いている部分で、「萬の事斯気を配らばよろしかるべし」と結ばれる。また、『都鄙問答』では自分の雇い先である「売先」にも誠意をつくせよという教訓が説かれる。「我身を養はる売先を疏末にせずして真実にすれば、十が八つは、売先の心に合ふ者なり。売先の心に合ふように商売に精を入れ勤めなば、渡世に何んぞ案ずること有るべき。」とあるが、これは広く捉えれば「各安生理」の「各志をたかぶらずして。我に当りたる職分をつとめバ（中略）一生安穩にしてくらすべし。」という部分に相当するであろう。

「各安生理」では「元より貧富貴賤ハ。天命定りてあれば。いかで人の力にてあらそふべき。」と、貧富貴賤は固定的であることを説いている。この部分は『商人黄金袋』にはみられない思想である。『商人黄金袋』には「朝夕間断なくつとめて。内外始末を第一とし。実議を以て。身を脩めは。財のあつまらざる事ハあらし。」とある。また、『都鄙問答』においても「商人は勘定委しくして、今日の渡世を致す者なれば（中略）是を重て富をなすは商人の道なり。富の主は天下の人々なり」と説かれている。堅実に勤めれば富むことが

できる、という論は「各安生理」とは矛盾する。同じく庶民教化を説いた書であっても、その背景にあるイデオロギーの差が如実に表れている部分だといえよう。こういった点から考えると、文坡の『商人黄金袋』には石門心学からの影響が見て取れるのではないだろうか。

寺谷隆は「庶民教化を行はんとする者が当該社会に於ける支配者である際には、かゝる教化は中立的な理念信条によるそれでは無く、支配者の意図に適合した奉公へ被治者を誘導する目的の下に行はれるのが常である」とまとめる。¹²これは至極もつともなことである。『六論衍義大意』はあくまで「幕府」における道徳規範が主たる内容であつて、そのイデオロギーは人民統治のための儒教である。対して『商人黄金袋』は町人の立場からした貨幣経済への対応論・処世論であつて、実学に即した世界観を形成している。

教理の内容は酷似していても、根本的な身分制度の捉え方が異なる点で、この「各安生理」は庶民文芸との間に決定的な差を持つといえる。

三一 二 『六論衍義大意』と談義本

庶民教化を目的とした書のジャンルとして、談義本の存在が挙げられよう。談義本が教訓性と滑稽がないまぜになったジャンルの書であることは周知の事実であるが、付け加えて談義本に心学の影響が強いことも説かれている。¹³

大本から半紙本への変化、談義の内容の変化などを挙げて広義と狭義ので談義本説を提唱している中野三敏によれば、¹⁴広義談義本の初期作品としては増穂残口の正徳五年（一七一五）刊『艶道通鑑』や佚斎樗山の享保十二年（一七二七）刊『田舎莊子』が挙げられ、狭義の談義本のはじまりは宝暦二年（一七五二）に刊行された静観房好阿の『当世下手談義』とされている。『艶道通鑑』に熊沢蕃山の、『田舎莊子』に荻生徂徠の影響があることが中野によって指摘されており、翻つてこれらと『六論衍義大意』との位置関係を考察することも可能であろうが、談義本の別称である前期滑稽本という呼び名が狭義の談義本に収まるものであることから後世文学作品への流れを汲んで、本論では『当世下手談義』以降の狭義の談義本と『六論衍義大意』について幾許か考察してみる。

『当世下手談義』は江戸戯作が花開ききつかけとなった作品として文学史上重要視されているが、この『当世下手談義』巻三「足屋の道千、売卜に妙を得し事」で説かれる教訓の中に「『大学』の一卷もおしへ、『六論衍義』大意など、毎日く読せよかし」という文言がある。¹⁵また、翌宝暦三年（一七五三）に出版された『教訓続下手談義』にも「近年板行仰付られし『六論衍義』に「長上尊敬」とあるがこゝ、じや」ともある。『当世下手談義』に関しては『大学』と並び称されていることから『六論衍義大意』を四民教化の為の書として捉えていることがわかる。

静観房好阿は三都を巡る談義僧の出身だという説が有力であるが、

作中に『六論衍義大意』という書名を挙げるなど、儒学を肯定する立場にあったようである。しかし『教訓統下手談義』には徂徠学派を否定する発言もあり、その儒教に対する立場は割に鳩巢に近いところにあるように考えられる。また、談義僧という立場は、庶民よりは一段上にいるが、俗世間の範囲内にとどまっているというような立ち位置であろう。そのような好阿が『六論衍義』でなく『六論衍義大意』を引き合いに出したということは、先の徂徠批判と関係付けるまでもなく、庶民階級に浸透していた書は『大意』の方であったということ物語っている。

しかし、この『当世下手談義』が刊行されたのが宝暦年間だということに留意しなくてはならない。既に吉宗も大岡忠相も死去しており、「享保の改革」も断片的に名残をみせるだけの社会に変化していた時代である。『六論衍義大意』自体も刊行した時ほど各地への影響がみられなくなっていた。¹⁶ 野田寿雄によれば『当世下手談義』は、刊行当時広くもてはやされると同時に、談義の方法が古臭いという揶揄もあったようである。野田は「町人に対しても「六論衍義大意」や貝原益軒の書を薦め、新規の所へ越すなとか、金を大切にせよとか、欲をこらえよとか、勘忍せよといった教訓を説くのは、やはり心学臭く保守的である」と述べる。¹⁷ 仮に野田の指す「心学」を「石門心学」だと断定してみる。石田梅岩は宝暦年間既に没しており、弟子の手島堵庵らによってその思想は広められていた。しかし梅岩自身の説の方が、堵庵の説よりも保守的であったとする考えが

一般的であり、『当世下手談義』が古臭いと揶揄された所以もそこにあると考えられる。

狭義談義本の始祖である『当世下手談義』にも『六論衍義大意』の影が確認された。しかしそれは時代風潮にはややミスマッチな、少々時代遅れの思想として軽んじられる傾向にあったのである。

では以降の談義本においてはどうかであろうか。

狭義の談義本が前期滑稽本として認識されうることを鑑みると、『滑稽』を前面に出した最初の談義本が宝暦十三年（一七六三）刊、風来山人の『風流志道軒伝』¹⁸であろう。浅草奥山で評判をとっていた舌耕家の深井志道軒に仮託して、当世の諷刺を行っている。

主人公の浅之進は風来仙人に授かった羽扇の力で国内の色街や『山海経』『和漢三才図会』『増補華夷通商考』等に登場する異国を悉くめぐり、最終的にたどり着いた女護ヶ島にて遊男となるが、風来仙人によって元の江戸へ飛ばされ、志道軒と名を改め浅草にて浮世の穴―うがちを語ることとなる。

五卷五冊本であるが、巻四までは浅之進の異国遍歴を描くことだけに重きが置かれている。そこに「教訓」を見いだすことはなかなか困難である。自序に「此書を取て、しかつべらしく讀（む）ものあらば、それこそ眞のたはけにあらざや」とあるように、教訓性を求めることそのものが嘲笑の対象となってしまう。しかし巻五はそれまでとはやや趣を異にする。再び風来仙人が現れ、仁齋学や『老子』『孟子』等の談義をはじめるのである。異国をめぐるきた

浅之進に対し

何れの國に至りても、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の五の道にもる、事なし。人のみにはかぎらず、蜜蜂の飛（ぶ）に君臣あり、鳥の反哺・鳩の三枝に、父子の礼備れり。鶏羽をさげて雌を愛し、猫の不遠慮にさかるも夫婦の道なり。鼠は十露盤に乗る兄弟あり。犬の尾をふつて集り、鱸すばしりの海にかたまるも、皆朋友の道なり。さればこそ、天地の間を引（つ）くるめて、聖人の教に上こすものなし。

（傍線引用者）

と説く。これは一見すると「各安生理」の思想に酷似している。しかし、この引用部の後「故に伊藤先生論語は宇宙第一の書といふ事、尤至極のことにあらずや。」と、伊藤仁斎の学説を肯定しているのである。仁斎の学説は熊沢蕃山や山崎闇斎らと対立し、一方で荻生徂徠とも相容れない。当然室鳩巢ともその学説や思想は異なってくるわけで、前引用箇所について風来山人が『六論衍義大意』を想定しているとは考えられない。仁斎を肯定するということは、当時の幕政の中心的思想である朱子学を否定するということである。広く捉えれば仁斎学も『六論衍義大意』も儒教であるが、『風流志道軒伝』には仁斎以外の儒学者への反論の色が見て取れる。

經濟の道は風俗を正し、足（た）らざるを補しげきをはぶく事、時に随ひ変に應ず、柱に膠し、酌子を以て定木とはしがたし。然るに近世の先生達、畑で水練を習ふ様な經濟の書を作（り）て、俗人を驚（かす）ことかたはら痛き事なり。

屁つぱり儒学者たちの論はかえって人を惑わすというのである。このような痛烈な批判が風来仙人の立場を借りて相次いで説かれるのである。ここで批判されている「經濟」とは、今日でいう消費活動等の「經濟」ではなく、広く政治論一般を指す意味での「經濟」であろう。享保の改革期に石田梅岩らが開講したことは既に述べた。ここで批判されているのは儒学者であろうが、広く捉えることが可能であれば、心学もここに含まれることになり、談義本に心学の要素があるという説に矛盾が生じることとなる。

一口に談義本と言ってもその談義の内容は作者により様々であり、この『風流志道軒伝』においては「各安生理」の享受を確認することはできなかつた。

談義本史の終焉地点頃にあるのが『商人黄金袋』と同作者である大江文坡の作品で天明五年（一七八五）に刊行された『成仙玉一口玄談』である。「夫道八元来一つにして 相を離れて見る則ハ 儒道も仏道も仙道も神道も皆ひとつの理なり」（卷三「忍辱仙人離諸相之談」という諸教一致のうち、とくにその仙道（道教）に重きを置いた文坡独自の思想である「神仙教」を談義するが、その語

り・文章は『当世下手談義』よりもずっと軽妙なものであり、風来山人からの影響が想定される。実際『成仙玉一口玄談』は主人公が日本国内だけでなく異国を遍歴するという『風流志道軒伝』と同様の趣向が展開される。

『風流志道軒』など前代の作品に影響されているのは文体だけではない。神仙教以外の思想においても様々な面において熊沢蕃山ら前代の思想家との共通点を見出せるのである。

『成仙玉一口玄談』は巻一にて主人公の箒良が風で異国に飛ばされ、同じく日本から飛ばされてきた和莊兵衛とが、二人に仙道を説かんとする仙人と会う場面が展開されるため、実際の談義は巻二から始まる。巻二冒頭で説かれるのは、世俗仏教の批判である。

愚者ハ無学無道心の沙門出家なり 内澄に妻子を養育し 魚鳥を喫ひて凡俗より意ハ劣りながら 人前にてハ知識高僧の顔をし 俗人を見下す高慢我慢ハ是かの富家の愚者の勝りて不便なり
(巻二 箒良遇和莊兵衛之談)

文坡が文壇に登場した当時は観化本を執筆していた。その後怪談本、道教の解説書などを出版しつづけてこの書に至った。文坡が僧侶出身であるという説は浅野三平が提唱して以降半ば定説と化しているが、もしそうであれば文坡が還俗した理由のひとつは大衆仏教への懸念があったからだと考えられるだろう。それまでの儒学者とて頭ごな

しに仏教を批判していたのではなく、やはり墮落した仏教の姿を批判していたのである。熊沢蕃山の『大学或問』にも「仏法を以て見れハ破滅の時至れり」とある。その具体的様相を蕃山は

真実に仏法によりて出家したるものハ。万人に百人ならん。其次ハ其身かたはなるか。士農工商乃一人の働きならざる者ハ是非なく出家したるもの万人に千人もあらん。其外ハ皆渡世の為に姦謀をなして姪欲肉食に飽たる事在家に勝れり

としている。『大学或問』と『成仙玉一口玄談』には百年の開きがあるが、仏教に対する悲観は同様のものである。これだけの時代の開きがあるにも関わらず見解が一致するのは、『大学或問』が実際の政策に関する意見をまとめた書であり、実学的観点からまとめられているためであろう。

『成仙玉一口玄談』には大衆仏教以外にも各宗教への言及があるが、儒教に関しては宋儒朱子は異譚であると断言する。近世中期の儒教はほぼ程朱学が基本にあるといつてよい。石田梅岩も諸教一致を説いたが、その中の「儒」に関しては程朱学を根底におく。先に述べたように風来山人も程朱学を真つ向から批判したが、文坡も風来山人とは違った角度から程朱学を批判する態度を見せたといえる。しかしながら「各安生理」に通じるものは『成仙玉一口玄談』にも見られる。巻四の「士農工商渡世意得談」である。人にはそれぞれ

れに天より与えられた職分があるということを説いた小話である。士農工商にそれぞれ役割があることはまさに「各安生理」であるし、梅岩が説く「職分を勉れば自から天下の用をなす」（『都鄙問答』）とも共通する思想である。しかし異なる点が二つある。まず一つは、それぞれの職分を果たすということに対する「理由」である。『六論衍義大意』では天下国家のためであった。梅岩も「四民を治め玉ふは君の職なり。君を相るは四民の職分なり。」（『都鄙問答』）と、やはり天下の枠組みの中にそれぞれを置いている。そしてそれらは「天職」と表現される。対して文坡は

役者の舞台を勤る意と 人々渡りの意と同じ意にて 浮世を相勤むべしといふハ 最前いふた役者の芸に依て 天子將軍より下庶民に至るまでの役を勤る意に於て 実に我もなく執着もなし 是を清浄無為真一の心といふなり（傍線引用者）

と、將軍も含め、人民の職分は清浄無為真一によるものだと説いている。この清浄無為真一は神仙教における最高仙人である。「天職」と表現されていたものに「清浄無為真一の心」という具体的な名が付され、自身の教理の一貫として談義されたのである。『六論衍義大意』も『都鄙問答』も、あくまで普段の生活の中での職分を説くことに重きが置かれたが、文坡の作品にはその職分が生まれた理由の方にこそ真意があるのである。

先に引用した部分の直前では具体的に歌舞伎を引き合いに出して「それぞれの職分を演じること」と説き、すなわちこの世に生れ出ることは浮世という大舞台へ出ることと同義であると結ぶ。役者になぞらえる方法は、おそらくこの時代の戯作において常套手段である『莊子』における寓言の方法を大きく捉えたものだと思われる。「各安生理」という儒教精神に準ずるものを説くのに道教が用いられていることも文坡特有の方法だといえよう。文坡は巻五「守一仙人示成仙玉之談」にて「今の世の浮世仮名草子見て旦夕を送る人の草紙仮名本を看るの序に 此書をも読ことを得」ということを目的に、草紙類の体裁や言葉遣いに倣ったことを述べている。まず読者の目に触れなければならぬとの考えは、はからずも吉宗が執拗に『六論衍義大意』を短くまとめるよう命令した態度と同様である。

『六論衍義大意』と『成仙玉一口玄談』における「各安生理」の思想は「似て非なるもの」であったが、『商人黄金袋』において散見された石田梅岩の思想との関連をこの作品からも読み取れることができた。しかし『商人黄金袋』と『成仙玉一口玄談』の思想も細部においては異なるといえる。この点は文坡の商業書・談義本へ対する執筆態度やその思想の変遷と共に細部に渡って整理していく必要があるため、別稿に譲る。

以上、狭義の談義本の諸作品と「各安生理」論とを比較検討してきた。『当世下手談義』に関しては、その談義の方法自体が時代遅れと揶揄されたこともあってか、儒教精神にかたよった談義、強く

言えば『六論衍義大意』の影が色濃く見て取れた。この作品を持って狭義談義本の出発点とするのなら、現在考えられている以上に享保の改革が庶民階級に与えた影響は甚大なるものだったのではないだろうか。

しかしながら『風流志道軒伝』のような談義本における「教訓」と「滑稽」の割合が逆転したような作品においては必ずしも享保期の庶民教化運動そのものが反映されているわけではない。もっと広い範疇において当世を諷刺し、穴をさがしている。狭義の談義本を前期滑稽本と同義と取るならば、その始めはあるいはこの『風流志道軒伝』としてもよさそうなものである。また、風来山人は当時の主流であった徂徠学や鳩巢ら専門の思想を受け入れていない。こういった所にも享保の改革が低調になってきた機運を確認することができる。この時点では『六論衍義大意』と談義本に直接の接点を見出すことが難しくなっているのである。

ただし、『六論衍義大意』の影響が談義本に見られなくなっていくというのには必ずしも時系列通りではない。『風流志道軒伝』から二〇年以上経過した後出版された作品が『成仙玉一口玄談』である。この作品の構成や文体こそ風来山人からの影響がありそうだが、内容に関しては『当下手談義』など風来山人以前の作家作品に逆戻りした感がある。もちろんこの作品の真意は作者・大江文坡が提唱する神仙教の教理を説くことであるから、『六論衍義大意』の思想が直接的に受け継がれているわけではない。しかし神仙教を説くた

めに「各安生理」と通ずる論を展開しているあたりは、文坡が『成仙玉一口玄談』以前に刊行した『商人黄金袋』を含めて石門心学からの影響を見て取れる。心学を実践哲学と捉えれば、談義本の一部、例えばこの『成仙玉一口玄談』には心学の要素が反映されており、心学というフィルターを通して『六論衍義大意』からの影響を考えることも可能となるのである。

おわりに

近世文学において「教訓」がどの書にも説かれるのは、中世（戦国時代）から庶民階級が社会基盤に組み込まれ始め、封建制度が確立し、為政者による統治方法の模索あるいは方針が書かれたからである。

細かく言えば將軍や諸大名の政權交代による政治方針の変化が文芸作品にも表れてきたということになる。近世後期になると作品の教訓色が薄れ、教訓そのものを滑稽や風刺の対象とするようになってくるのは、天下太平の象徴とも考えられる。

八代吉宗に関していえば、彼が征夷大將軍に任命された時代は六代家宣以降の流れで將軍権力が弱体化しており、五代綱吉以降悪化の一途をたどっていた財政がついに破綻する²⁰。家格や血筋を超えて將軍職に抜擢された吉宗の治めるべき時代はそのような低迷した時代であり、それを打開すべく政治方針の転換すなわち享保の改革によって様々な政策が打ち出された。その様相が庶民文芸に反映され

ることは至極当然である。

『六論衍義大意』にて説かれた経世済民の思想は心学という実践哲学を通して近世中期文芸に取りこまれ、より多くの民衆へと浸透・発展していったのである。

- 1 本文の引用は全て瀧本誠一編『日本経済叢書卷二』（一九一四年、日本経済叢書行会）所収の「兼山秘策」による。
- 2 本文の引用は源了圓・前田勉校注『東洋文庫574 先哲叢談』（一九九四年、平凡社）による。
- 3 本文の引用は『國史大系第四十五卷 徳川實記』（一九六五年発行、吉川弘文館）による。
- 4 東恩納寛惇「六論衍義伝」（『東恩納寛惇全集8』）所収、一九八〇年初版 一九九四年再版、第一書房
- 5 寛政三年（一七九二）刊。本文の引用は石川松太郎監修『往来物大系第三十六卷』（平成五年発行、大空社）所収の「教訓道しるべ」による。
- 6 後藤陽一・友枝龍太郎／校註『熊沢蕃山 日本思想大30』（一九七一年初版、岩波書店）
- 7 天明八年、山崎金兵衛・林伊兵衛・小川新兵衛・山口又一・泉本八兵衛版。『大学或門』は寛政年間に発禁になり、天明八年（一七八八）に復刊した。
- 8 本文の引用は『日本経済叢書卷三』（一九一四年発行、日本経済叢書刊行会）所収の「獻可録」と、東洋大学図書館蔵本『鳩巢獻可録』を校合したものによる。
- 9 中山久四郎「六論衍義に關する研究」（『三宅博士古稀祝賀記念論文集』）所収、一九六五発行、岡書院

10 矢島玄亮編。一九七六年発行、万葉堂書店。

11 元文四年（一七三九）刊。本文の引用は足立栗園校訂『都鄙問答』（一九三五年初版、一九七〇年第九版発行、岩波書店）による。

12 寺谷隆「宝暦前後に於ける庶民教化の一断面」（『国語国文』一九五三年四月号所収、京都大学文学部国語学国文学研究室）

13 野田寿雄「談義本について」（『国語と国文学』一九五〇年一月号所収、東京大学国語国文学会）

14 中野三敏校注『新日本古典文学大系八一 田舎莊子 当世下手談義 当世穴さがし』（一九九〇年五月発行、岩波書店）

15 本文の引用は注14による

16 次に『六論衍義大意』が大きくもてはやされるのは天保の改革期である。石川謙著『寺子屋』（一九六六年発行、至文堂）には、手習師匠への褒賞はいつも『六論衍義大意』であったことが述べられている。

17 野田寿雄「寶暦期初頭の文學的一現象」（『文学』一九五四年二月号所収、岩波書店）

18 本文の引用は中村幸彦校注『日本古典文学大系55 風来山人集』（一九六一年初版発行）所収の「風流志道軒伝」による。

19 浅野三平「大江文坡の生涯と思想」（『近世中期小説の研究』一九七五年発行、桜楓社）

20 作家・童門冬二は経済雑誌『Forbes（日本版）』にてこの財政破綻を「元禄バブルの崩壊」として論じる（『Forbes（日本版）』一九九五年四月号、ぎょうせい）。

* 引用文における漢字は原則として旧字のままにした。ルビは特に必要と考えられない場合極力排除した。

The Thought of “Administration of the Nation and Relief of the People” in *Rikyuengitai*— “Onoono Seiri wo Yasunzu” (accomplish work in the social position of each person) and Japanese literature in the middle period of the early modern times

MATSUOKA, Yoshie

In the Edo era, reform of the Kyoho era was performed in the days of a thing of General 8's Yoshimune. The one is reinforcement of the common people education, and “Rikyuengitai” was published. There are six items about the education of the common people in this book, and there is “Onoono Seiri wo Yasunzu (各安生理)” in that. This is teaching to “carry out a role given each person agriculture and industry dealer social position”. This is planning to be based on Confucianism, but it is sublimated by the common people, and the same thought is watched in light fiction and popularized ethics.

Economic ruin happened in the days of Kyoho. It was replaced by a monetary economy that the economic world was administered at a price of rice in conjunction with it by a standard. Thus a lot of commerce books was published in this time. The one is “Akindokoganehukuro” which Bunpa Ooe wrote. This book preaches whole nation equality and preaches the mental attitude of the merchant. And thought like Baigan Isida is seen in there. Baigan founds a private supplementary school later in Kyoto for seven years when “Rikyuengitai” was published. Because Baigan was a native place of the merchant's family, I preach the mental attitude of the merchant like Bunpa. In addition, there is it in “Dangibon (談義本)” that the influence featured the theme of education of “Rikyuengitai”. The lesson of the same contents is written as Jyoukannboukoua “Imayouhetadangi”, words that praised “Rikyuengitai” in “Jyousenndamahitokutigenndan” which Bunpa wrote and “Rikyuengitai”.

I assign a focus to “Onoono Seiri wo Yasunzu” by the main subject and compare “Onoono Seiri wo Yasunzu” with literature at the middle in the early modern times and want to preach the idea which I rule the world in “Rikyuengitai”, and improve by the life of the people.